

作句経験のない大学生は俳人の作品を どれだけ判別できるか

— 石田波郷・山田みづえ・山口誓子・細見綾子の作品 —

仁 平 義 明¹・田 村 美紗子²

1. はじめに

(1) 芸術作品の鑑賞：鑑識眼

芸術作品の鑑賞では、エキスパートと素人の間で何がちがうのだろうか。

ハイデルベルク大学の心理学者Hagerたち（2012）は、絵画の鑑賞者の反応を分析して、鑑賞反応がおよそ次の6つの因子から構成されていることを報告した。①認知的な刺激作用（例：この絵はいろんなことを考えさせる）、②ネガティブな感情の喚起（例：孤独感がある作品だ）、③エキスパート性（例：私は、この絵と、ある画家の絵の共通点がわかる）、④自己への関連づけ（例：この絵からは自分自身の記憶が呼びさまされる）、⑤芸術としての質の良さ（例：この絵は創造性のレベルが高い）、⑥魅力（例：この絵はワクワクさせるところがある）。

エキスパートと素人のちがいは、因子の名前と内容からしても、6つの因子のうち特に「③エキスパート性」にあるといえる。この「エキスパート性」因子に負荷量の大きい項目は、“私は、この絵の絵画史上の位置づけがわかる”、“私は、この絵と別なある画家の絵の共通点がわかる”、“この絵の作者が何を伝えたいと思っているかがわかる”、“この絵を知っている”な

¹白鷗大学教育学部, ²東北大学文学部
e-mail : nihei@fc.hakuoh.ac.jp

どの反応から構成されている。このように「エキスパート性」には、作品のスタイルの判断、作者に関する知識、作者の同定能力、その分野の俯瞰的知識、作品の意図の理解など、いくつかの知識と能力が含まれている。エキスパートの鑑賞を特徴づける認知の特徴は、「鑑識眼」といいかえることもできるが、Hagerたちが行ったのは、あくまでも「絵画」の鑑識眼研究である。

時津裕子は、考古学の研究から心理学の研究に転じ、二つの領域の橋渡しをする鑑識眼の研究によって日本での「認知考古学」の確立に貢献した一人である。彼女は、著書『鑑識眼の科学—認知心理学的アプローチによる考古学者の技能研究』の中で、鑑識眼についてこうまとめている：「鑑識眼という認知技能のより本質的な理解をめざすためには今後、多様な専門領域間での差異と共通性を探ること、すなわち鑑識技能の領域固有性／一般性を検討する視点は不可欠である。」（時津，2007，p.179）。

芸術作品の鑑賞でも、エキスパートと素人の間では、絵画や俳句といった領域を超えた一般的な特徴の差と、領域に固有な特徴の差があると考えられる。エキスパート研究は、それぞれの領域での鑑賞の熟達化研究が積み重ねられることで、はじめて一般性をもつことができる。

(2) 俳句鑑賞でのエキスパートと素人の差

俳句の分野では、皆川（2001）は、エキスパートとしての俳句の「実作者」の選句傾向と俳句に特別な知識を持たない「大学生・大学院生」の好み的一致性について分析を行った。その結果、実作者が「共感を覚えた俳句」と学生が「好きな俳句」として選んだ選択率には、かなりの乖離がみられることが報告された。皆川（2001）の結果には「実作者選択率・読者（学生）選択率ともに上位の7句」「実作者選択率では上位だが、読者選択率では中位の5句」「実作者選択率では上位だが、読者選択率では下位の11句」「一般読者選択率のみ上位であった俳句の例（5句）」が示されていた。そこで、この合計28句だけについて、実作者選択率と一般読者（学生）選

作句経験のない大学生は俳人の作品をどれだけ判別できるか

採率の間で相関係数（ r ）をあらためて計算してみると、相関係数は、 $r = -0.351$ ($p = 0.067$) と統計的に有意に近い負の相関になる。エキスパートと素人の俳句の選好は、むしろ逆になる傾向があった。つまり、エキスパートが良いとした俳句と素人が好んだ俳句は正反対なのである。こうした傾向は、句会での実感と一致しているかもしれない。

アメリカの心理学者Blasco & Merski (1999) はアメリカ人による英語俳句の鑑賞について研究を行った。俳句は、子どもから経験の長い俳人まで多様な作者による117句であった。対象者は、与えられた俳句について、①解釈しやすさ、②俳句に表現されたアイデアの親しみやすさ、③俳句の良さ（あるいは好感度）、④イメージの浮かびやすさ、⑤表面的な言葉を超えた象徴性について、自分の考えを記述するように求められた。結果からは、これらの5つの鑑賞指標の間には、中程度のあるいは高い相関があることが明らかにされた。また、エキスパートほど「深い解釈」を行う傾向があることが確認された。

このように、俳句鑑賞では日本人、アメリカ人ともにエキスパートと素人の間にちがいがあがるが、ちがいがどのような学習や要因に由来するかは、これからの研究を俟たなければならないだろう。エキスパート研究でも俳句を扱ったものはあまりにも少ないからである。

2. 本研究の目的

本研究では、自分で能動的に俳句を作った経験のない“素人”であっても、異なる俳人の作品に対する評価をどの程度弁別的にできるか検討を行った。

そのために、4人の俳句作家の作品それぞれ4句ずつ合計16句の俳句作品に対して素人がどのような鑑賞反応をするか、2つの研究を行った。

第一の研究では、対象者には俳句の作者の名前を知らせないで、4人の俳人の句4句ずつ合計16句を4人の作者に強制的に分類させる「作者分類課題」を課すことで、未経験者が作者の作風を実質的にどの程度認識でき

ているかを検討した。結果の分析から、それぞれの作者の句が多次元の類似性空間上でどのようなまとまりを見せるか、また類似性空間を構成している次元の要因は何なのかを明らかにすることが目的であった。

さらに、この研究には、もう一つ別な目的もあった。後で述べるように、研究では4人の俳人の作品が使用されたが、そのうち2人は、師弟関係にある「石田波郷」と「山田みづえ」であった。別な目的というのは、この師弟の関係が、関係を知らない俳句未経験者の目にどの程度反映されて、2人の俳句がどの程度近縁なものとして感じられるかを検討することである。具体的には、多次元の類似性空間の中で、2人の俳句合計8句が、他の2人の作者の俳句8句よりも近い位置になるかどうか分析することであった。もし、2人の8作品が他の俳人たちの作品よりも近い位置にあれば、たとえ未経験者であっても、作者のスタイルを暗黙のうちに認識できているといえる。

第二の研究では、素人の俳句の評価・印象次元がどの程度分化しているか、つまりさまざまな評価・印象次元にどの程度連関があるか、独立性があるかを明らかにしようとした。対象者には、それぞれの俳句の「好悪度」「共感度」「作者の感情強度」「イメージの鮮明さ」「自分の経験との共通性」「主観評価:作品として優れている」について評定を求めた。これらの指標の相関分析を行うことで評価・印象次元の連関と独立性が明らかにされると考えられる。

しかし、この論文では、第二の研究で扱ったさまざまな評価次元の相関という問題よりも、異なる俳人による俳句のスタイルを素人がどのくらい認識可能かという、より本質的な問題を扱った第一の研究の結果に限定して述べることにする。

3. 材料となる俳句と俳人

研究では、4人の俳人の代表的な俳句4句ずつ合計16句が材料として用いられた。

作句経験のない大学生は俳人の作品をどれだけ判別できるか

4人の俳人は、山口誓子、細見綾子、石田波郷、山田みづえであった。

4人ともに、日本の俳句史上に残る現代の俳人である。

山口誓子（1901～1994）は、京都府生まれ。水原秋櫻子・高野素十・阿波野青畝とともに高濱虚子門の『ホトトギス』四Sと称された一人。『天狼』主宰、代表的句集に『凍港』ほかがある。芸術院賞受賞者、文化功労者。

細見綾子（1907～1997）は、兵庫県生まれ。夫の澤木欣一とともに『風』主宰。句集に『桃は八重』、『伎藝天』ほか。

石田波郷（1913～1969）は愛媛県生まれ。水原秋櫻子に師事。句集『惜命』ほか。『鶴』主宰。『定本石田波郷全句集』により読売文学賞。

山田みづえ（1926～2013）は、仙台市生まれ。日本語文学を確立し文化勲章を受章した山田孝雄の次女。石田波郷門下。『木語』主宰。句集に『忘』『手甲』ほか。句集『木語』により俳人協会賞。

俳句鑑賞の材料になる句は、4人の俳人それぞれに代表的な句のうちから春・夏・秋・冬の各季1句の4句、合計16句を選んだ（表1）。

表1 研究で用いた俳句

	石田波郷	細見綾子	山口誓子	山田みづえ
春	春雪三日祭の如く 過ぎにけり	ふだん着でふだん の心桃の花	巨き船出でゆき蟹 気楼となる	負け犬を訪ひ来る 犬や花散れり
夏	蚊を搏つて頬やは らかく癒えしかな	遠雷のいとかすか なるたしかさよ	ピストルがプール の硬き面にひびき	麦藁帽手にやはら かく夏果てぬ
秋	車椅子いま押され をり萩の中	どんぐりが一つ落 ちたり一つの音	秋の暮水中もまた 暗くなる	皮剥けば内明かあ かど青蜜柑
冬	ニコライの鐘の愉 しき落葉かな	くれないの色を見 てある寒さかな	ふゆかわ 新聞全紙浸 かり浮く	膝抱きて 荒野に似 たる年忘れ

俳句の表記は旧仮名遣いによった。また、読み方の違いなどによって俳句の解釈に多義性が生じる可能性を考慮して、漢字にはすべてルビを振った。俳句は、1句ずつ個別に短冊型のカードに縦書きで印刷され対象者に提示された。

なお、俳人と俳句の選択は、俳人協会会員である第一著者が行った。

4. 研究：作者の同一性判断

学校の授業で習った程度の俳句経験しか無い学生を対象に、作者の同一性判断がどのくらい可能かを検討した。対象者には、提示された16句を、同じ作者だと判断される作者4人にグルーピングし、次にそれぞれの俳句の作者の性別判断を求め、さらに俳句の作者が同一であると判断した「手がかり」が何であったかを記述させた。ただし、性別判断と手がかり判断についての結果は、ここでは省略する。

1) 方法

対象者は、大学の学部学生と大学院生24人（男性12人、女性12人）。

俳句の作者別グルーピングは、対象者一人一人個別に行った。まず1句ずつ書かれた16枚のカードを渡し、以下の指示によって判断を求めた。

カードに書かれている16の俳句を読んでください。この16句は、4人の作者によるものです。

一人の作者ごとに4句ずつあります。

- 1) 俳句から受ける印象だけで、16句を4人の作者に分けてください。
- 2) 作者の判断の手がかりにしたことは、何だったですか？
- 3) それぞれの作者の性別を推測してください。男女同数とは限りません。
- 4) それぞれのグループの4句の俳句を、あなたが共感できる作者の順に1から4までならべてください。

【注】 実際には、俳句の作者は男性2人女性2人の同数だった。しかし、そのことをあらかじめ報知すると、対象者が3人の性別を判断した後に残りの1人には判断を行わず機械的に残りの性別を割り当てる可能性があった。そのバイアスを避けるために、3)のように男女同数とは限らないという教示を行った。

2) 結果と考察

4句内の同一作者率

同一の作者のものとしてグルーピングされた4句の同一作者率を図1に示した。大学生が、各俳句にあらわれた俳人のスタイルをまったく抽出できずに16句をランダムに4つのグループに配分すると、各グループ内の同一作者率はゼロになるが、計算上 $1/4=25\%$ とした。4つのグループの中で、実際に4句とも同じ作者の句だった場合(100%)、3句の場合(75%)、2句の場合(50%)、1句の場合つまり4句それぞれが実際にはバラバラな4人の作者の句だった場合(25%)を、それぞれの同一作者率とし、平均値を算出した。

結果では、どの俳人の4句でも同一作者率はランダムレベルの25%を越えて40%以上になっていた。このことは、たとえまったくの素人であっても、同じ俳人の句にはある程度共通性を感知できることを示している。

とくに山口誓子の句は、女性の対象者からは同一の作者だと判断される確率が高かった。

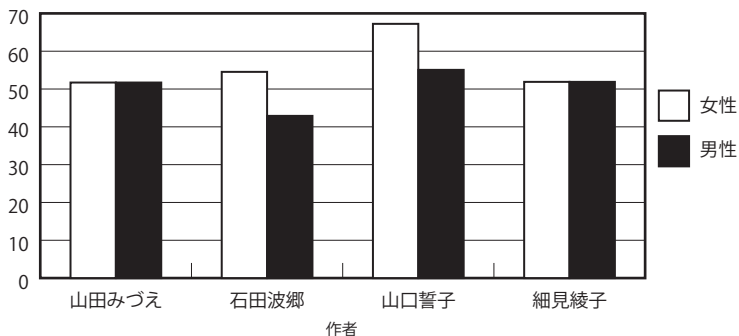


図1 大学生が同一俳人の4句だとした俳句群内での実際の同一作者率(%)

俳人4人の句の類似性をどう判断したか

俳句経験のない大学生の感覚では、4人の俳人の16句は、どのように似ていて、どのように違っているのだろうか。

俳人であれば、16句はすべてよく知っている句であり、類似性の判断を求めようとしても「波郷の句」「みづえの句」「誓子の句」「綾子の句」と単純にカテゴリー化されてしまう。逆に、この知識がエキスパートによる俳句の類似性判断を曇らせてしまう可能性がある。

俳句経験がない大学生による各句の類似性判断を分析するために、次のような方法をとった。

まず、それぞれの句が何人の対象者によって別な句と同一作者による句だとされたか、その人数を求めた。たとえば、誓子の句「ピストルがプールの硬き面にひびき」を、みづえの句「膝抱きて荒野に似たる年忘れ」と同じ作者の俳句だとして分類した対象者が24人中24人ならば、100%の対象者が2つの俳句の類似性・共通性を感じたことになる。この数字を類似性判断の指標とした。

このようにして、16句それぞれの間での類似性マトリクスを作成し、このマトリクスに基づいて、多次元尺度法による解析を行った。データの解析は、SPSS, ver.15によって行った。

解析では、2次元解と3次元解を求め、それぞれの解による各次元の組み合わせ空間内に16句をプロットしたとき、各俳人の俳句の関係が最も明解に表現されるのは、どの次元の組み合わせであるかを検討した。その結果、16句を3次元解の次元Ⅰと次元Ⅲの空間にプロットしたとき、俳人ごとに句群が最もまとまり、解釈しやすいかたちで4俳人の俳句群が相互に分離することが明らかになった(図2)。

図2は、どの俳人のどの句が近い関係があると大学生が認識したかを示している。

この中で、他の俳人の句群から離れて最もまとまりを示しているのは山口誓子の4句である。「冬河に新聞全紙浸かり浮く」「ピストルがプールの

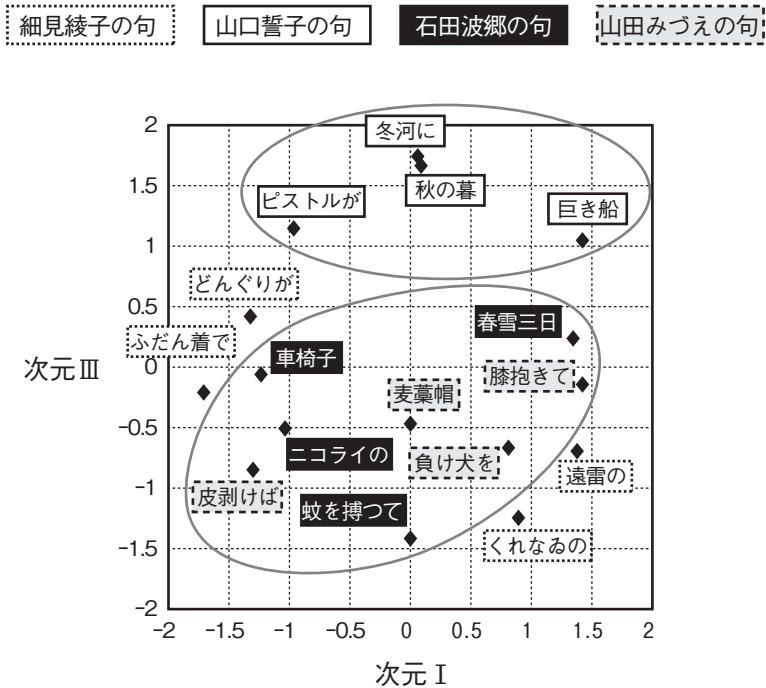


図2 多次元尺度法による類似性空間内での4俳人の俳句の布置
(俳句経験のない大学生の俳句グルーピングの結果)

硬き面にひびき」「秋の暮水中もまた暗くなる」「巨き船出でゆき蜃気楼となる」が次元Ⅲの高い位置の比較的近い空間内に分布していた。次元Ⅲの軸は、「客観性・客体性—主観性・主体性」として解釈できるが、誓子の4句は「客観性・客体性」の要素が強いといえるだろう。この対極にある句が「蚊を搏つて頬やはらかに癒えしかな」「くれなゐの色を見てゐる寒さかな」であり主観性・主体性の句であることをみても、その可能性が高い。

これに対して細見綾子の4句は、2つの別なグループにはっきりと分離した。「どんぐりが一つ落ちたり一つの音」「ふだん着でふだんの心桃の花」と「遠雷のいとかすかなるたしかさよ」「くれなゐの色を見てゐる寒さかな」の2群である。

このように4句の範囲内でも、細見綾子の俳句は一つのきまったスタイルを持っていない。ときとして作風が異なるというべきか。

一方、師弟関係にある石田波郷と山田みづえの8句は、近い空間内に混在して分布していた。

山田みづえの句「皮剥けば内明かあかと青蜜柑」は、石田波郷の句群の最も「波郷らしい」位置にあり、逆に波郷の「春雪三日祭の如く過ぎにけり」は最も「みづえらしい」位置にあった。石田波郷、山田みづえの句は他の俳人たちの句群とは分離しており、相互に近い空間内にあった。このように大学生たちは、とくに意識しないままに、師弟の俳句の共通性を認識できていたのである。

それでは次元Ⅰは、どのような要因を反映しているだろうか。この軸の対極にある3句ずつは、一方は「巨き船出でゆき蜃気楼となる」「春雪三日祭の如く過ぎにけり」「膝抱きて荒野に似たる年忘れ」、他方は「ふだん着でふだんの心桃の花」「どんぐりが一つ落ちたり一つの音」「皮剥けば内明かあかと青蜜柑」である。

前者は後者よりも長いタイムスパンの変化あるいは「推移・完了」の句であり、後者は比較的短いタイムスパンの現象あるいは「現在」の句だといえる。

しかし、次元ⅢとⅠの両極の要素としてあげたものは、その一つの要因に過ぎず、他の要因の合成として各次元があると考えるのが適切だろう。

5. 「春雪三日祭の如く過ぎにけり」

直接に作者分類をさせた成績からは見えてこないが、結果をあらためて多次元尺度法によって解析すると、俳句経験のない大学生であっても意識しないうちに俳人の俳句群を明確に判別していることが示唆された(図2)。

また、石田波郷と山田みづえという師弟関係にある俳人の俳句8句は、ごく近い類似性空間に位置することが明らかになった。

作句経験のない大学生は俳人の作品をどれだけ判別できるか

その中でも波郷の句としてよく知られている「春雪三日祭の如く過ぎにけり」は、大学生の判断による類似性空間内では、むしろ最も「みづえらしい」位置を占めていた。

ところで、われわれは、研究1の前に、石田波郷と山田みづえの俳句について次のような予備的検討を行っていた。

大学生・大学院生20名に、波郷とみづえの俳句が合計10句書かれた10枚のカードで、一句ずつを読んで、どんな感情が喚起されたか自分の言葉で記述し、感情の強さを10段階で評定するように求めた。

この感情喚起度について因子分析（バリマックス回転）を行うと、比較的大きな2つの因子が出現した（累積寄与率=66.3%）。

2つの因子は、ほぼ波郷の句とみづえの句それぞれに大きな負荷量がみられ、「波郷因子」「みづえ因子」とも呼べるものであった（表2）。

表2 俳句を読んで喚起された感情の強さの評定値についての因子分析
（バリマックス回転）結果：各句の因子負荷量

	第1因子 (みづえ因子)	第2因子 (波郷因子)
◎春雪三日祭の如く過ぎにけり	.765	.374
●蚊を搏つて頬やはらかに癒えしかな	.447	.692
●車椅子いま押されをり萩の中	.010	.830
●白き手の病者ばかりの落葉焚	.054	.640
○早春の見えぬもの降る雑木山	.393	.696
○桃活けてその一日を軽くせり	.776	.315
○麦藁帽手にやはらかに夏果てぬ	.770	.350
○東京の何に堪へある冬木かな	.855	-.045
○膝抱きて荒野に似たる年忘れ	.819	.037

【注】●は石田波郷、○は山田みづえの句。◎「春節三日」

みづえの句「早春の見えぬもの降る雑木山」だけは「波郷因子」に比較的大きな負荷がみられたが、問題なのは、波郷の句「春雪三日祭の如く過ぎにけり」である。

この句は、作者であるはずの「波郷因子」の負荷量が大いではなく、「みづえ因子」の負荷量が逆に大きくなっていた。

このように、研究1の作者グルーピングによる多次元尺度法による解析結果も、句の感情喚起度についての因子分析結果も、ともに「春雪三日」の句が波郷よりも「みづえらしい」句であることを示唆している。

この結果は、師弟関係にある俳人では、俳句経験がない者の判断にも反映されるような共通性のある俳句が存在することを示す良い例だといえる。

ただ、この句についてはもう一つの事実が関係している可能性も考えられる。

山田みづえは、主宰誌『木語』創刊時（1979）から、故郷でもある仙台をこまめに訪れて俳句の指導を行った。山田みづえは、門人である第一著者の自家用車に同乗する機会が度々あり、その際に、「春雪三日」にまつわるエピソードを語ったことがある。この句は石田波郷が入院している時につくられた句として知られている。その入院時に山田みづえは師を見舞い、短日のうちに消えてしまった春雪を波郷との話題にしたというのだった。

他のみづえの句よりももっと「みづえらしさ」を持った「春雪三日」の句は、ある意味で、師弟の楽しい共同作業の産物だといってよいのかもしれない。

【研究の分担】

第一著者は、本研究のアイデアを提出し、研究全体の計画と立案を行った。また、材料となる俳人の選定と俳句の選択を担当した。さらに、多次元尺度法による解析を行い、それぞれの俳人の句が最も明確に分離をする次元配置を決定した。

作句経験のない大学生は俳人の作品をどれだけ判別できるか

第二著者は、実験を担当し、上記以外の部分のデータ処理を行った。因子分析については第一著者がStatView4.5を用いて行った。結果は、第二著者が東北大学文学部卒業論文としてまとめたほか、第一著者が多次元尺度法による解析結果について、日本心理学会第70回大会（2006）ワークショップ「俳句の魅力—「読み」への心理学的アプローチの可能性—」において、第二著者を共同研究者として話題提供を行った。

【引用文献】

- Blasko, D. G. & Merski, D. W. (1999). Haiku: When goodness entails symbolism. *Metaphor and Symbol*, 14, 123-138.
- Hager, M., Hagemann, D., Danner, D., and Schankin, A. (2012). Assessing Aesthetic Appreciation of Visual Artworks—The Construction of the Art Reception Survey (ARS). *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 6, 320-333.
- 皆川直凡（2001）文芸作品の認知・読解過程に関する研究（Ⅲ）—俳句の実作者と一般読者に選句傾向の違いの検討—。日本心理学会第65回大会発表論文集，477。
- 時津裕子（2007）鑑識眼の科学—認知心理学的アプローチによる考古学者の技能研究 青木書店

謝辞

第一著者は、山田みづえ主宰の俳句結社「木語」の会員であり、俳誌『木語』創刊の1979年から終刊の2004年まで25年間、教えを受けた。門人としては文中「みづえ先生」と書くべきであるが、論文という性格上、お許しを願うものである。石田波郷は師の師である。

波郷先生とみづえ先生の俳句に共通するものは、今回の対象者である大学生が作者判別に使用していた外形的な要因は別として、すべての俳句に「凜」としたものが通奏低音のように流れていることだと感じる。

毎月の『木語』への投句をせいぜい年に2、3回程度しかなかった著者に、みづえ先生は、俳句を出さないのなら毎月どんなことでもいいから

仁 平 義 明・田 村 美紗子

好きなことを書きなさいと、「窓を開けば」というタイトルまで指定して毎号1頁の連載をするよう命じられた。連載は、平成12年11月号から『木語』終刊の平成16年8月号まで5年にわたり続いた。この連載は、後に『百人のモノ・リザー俳句から読む心理学』（2006 ブレーン出版）として一冊にまとめた。

不肖の怠惰な弟子でありながら、可愛がっていただいたと感じる。木語終刊以来、俳句を作らなくなってしまったが、今は亡き先生の口調が耳に浮かぶ。

「よしあきさん、だめよ」